

近世日本における ハウトイン『自然誌』の利用

平野 満*

はじめに

2000年度の図書館特別資料としてオランダ語の博物学書4点が購入され、明治大学図書館の蔵書となった。これらの書物はいずれも、近世日本の蘭学者や本草学者たちによって利用されたことが知られている。ここでは、書名は知られているものの利用の実態が知られることの少ないハウトイン著『自然誌』をとりあげて、利用された事実の一端を紹介する。ハウトイン著『自然誌』の原題は、Linnaeus, C. / Houttuyn, M. “Natuurlyke Historie of uitoerige beschryving der dieren, planten en mineraalen, volgens het samenstel van den heer Linnaeus.”** である。書名を直訳すれば『自然誌、またはリンネ氏の体系による動物・植物・鉱物の詳細な記述』であるが、本稿では単に『自然誌』とする。また Houttuyn は近世日本では「ホツタイン」と表記されたが、本稿ではオランダ語の発音にちかい「ハウトイン」とする。

本書は出版業者であった著者の父によって、1761-1785年にアムステルダムで出版された。動物部18巻18冊・植物部14巻14冊・鉱物部5巻5冊の全37巻37冊。全巻に挿入される挿図(296図)は銅版画による。図は手彩色されるものと無彩色のものがあるが、購入書は手彩色図である。本書はカール・リンネが生物の二分類法を確立した後、この分類法による自

*ひらの・みつる / 文学部教授 / 日本近世思想史

**請求記号: 091.3/838//H

然誌としてヨーロッパでももっとも成功したといわれる自然誌である。近世後期の日本に輸入され、蘭学者や本草学者たちによって盛んに利用された。完訳はない。「林娜斯」「林娜氏」として引用されるものの多くは、本書からの引用あるいは本書を参考にした知見であることが多い。ハウトインの『自然誌』は本草学者や蘭学者にとって、座右の参考書のひとつであった。

以下に、私が知り得た訳出あるいは引用された例を紹介するが、断片的な記事として引用され参照された例はこのほかにもまだまだあるはずである。その詳細は今後の研究によってさらに明らかになるものと期待する。

1. ハウトイン『自然誌』の来舶と所蔵者

(A)ハウトイン『自然誌』がいつ日本に齎されたかははっきりしない。松田清氏によれば、平戸藩主松浦静山の「平戸藩楽歳堂蔵書目録 卷第十五別録」に「荷蘭陀本 証文一通附 三拾六巻」が記載され、本書には寛政元年(1789)9月3日に長崎通詞紫筑善治郎(善次郎)より入手した旨が付記されているという。松田氏は、巻数から判断して、これはハウトイン『リンネ氏の体系による博物誌』の可能性があるとし、事実とすれば、本書舶載の早い例として注目すべきものという⁽¹⁾。

(B)天保年間、富山藩主前田利保が福岡藩主黒田斉清と共同で「蘭書ノ林娜氏トイヘル書」を購入したという。前田利保の事跡数件を合綴した史料の中にある「蘭学」に次の記事がある⁽²⁾。

一御十代利保公、天保年間ノ頃蘭学ニ執心セラレ、其頃江戸市街ニ宇多川榕庵ト云ヘル蘭学家ニテ舎密学ニ秀テタル人アリケルヲ、折々聘セラレテ其学ヲ勉強サレケル。故ニ蘭書モ追々購求セラレケル。其後、旧幕ノ奥医畑中善良、外ニ薩藩曾将酋トカ云ヘル仁モ折々召サレケル。就中、同席ニ筑前博多公黒田備前侯ト懇親セラレ、蘭書ノ林娜氏トイヒル書ヲ一部両公ニテ購求セラレ、前後ヲ操替熟覽セラル、事モアリ。尤、此書ニハ甚ダ勉強セラレ該訳解数多稜萃セラルレトモ、惜哉完全ナラス。又物印満草木図解ノ訳書ヲ以、和

漢ノ草木品類ニ適當セラレシ訳解モ許多アレトモ、其全ク纏リタル見ヘ不レハ、爰ニ其書目ヲ洩シヌ。

宇田川榕菴『自叙年譜』⁽³⁾には、天保八年五月朔日「為富山侯召講林娜斯書」と、榕菴が利保に招かれて「林娜斯書」を講じたことを記して、上記の記事を裏付けている。利保は幕府医官畑中善良、薩摩藩医曾将酋(昌・占春の男)を招いて蘭書を学んだともいう。

美濃大垣の蘭学者江馬活堂は天保14年、大垣藩の江戸詰医師に任ぜられ江戸に出た。この時の記録が『藤渠漫筆』九編三に収められる「東海紀行」⁽⁴⁾である。「東海紀行」には当時の江戸の本草学界の様子が描かれており極めて興味深い。ここでは略さざるを得ない。活堂は天保14(1843)年6月6日大垣を出発。江戸に到着すると、さっそく坪井信道、宇田川榕菴に招かれている。榕菴からは「黒田楽善公に物産の会あり出でて席に陪せよ」と勧められ、福岡藩主黒田斉清(楽善堂)の邸で開催されていた本草研究会に出席した。その縁で同年閏9月9日、当時悪化していた黒田斉清の眼病を診察した。このとき園中の草木を拝見した後、黒田家家蔵の西書や大塊の磁石などを見せてもらった。このなかに『リンナウス』『ウエイマン』等の珍書数部があったという。このとき活堂が見せられた『リンナウス』が、前田利保と共同で購入したというハウトイン『自然誌』と考えられる。このときは黒田のもとにあったのであろう。このハウトインの図は無彩色であった(②を参照)。

(C) 飯沼慾斎の「平林荘所蔵諸品目録」(慶応元年)には蘭書として「リンナウス 二箱四十巻」が記載され、本草書には「林氏譯稿 十四冊/一冊/別二目録小冊子一冊添」とあるのが、ハウトイン『自然誌』の原本と慾斎による訳稿と考えられている⁽⁵⁾。慾斎のハウトイン『自然誌』入手の時期・経路とも不明で、現在はこの原本と訳稿の大部分は行方不明である。

(D) 早稲田大学図書館洋学文庫の岡村氏旧蔵書のうちに、「Linné, Carl von. "Natuurlyke historie of uitvoerige beschryving der dieren, planten en mineraalen,..." deels 2., stuk 8.10. Amsterdam, F.HOUTTUYN, 1777-79.」(宇田川家旧蔵)がある。未見だが、目録によれば、stuk 8.の内容は「De kruiden」, stuk 10.は「ditto.」とある。これはハウトイン『自然誌』第2部(植物部)の第8巻(薬草部)と第10巻(同上)にほかならない。宇田

川家にはもともとこの2冊だけが所蔵されていたのか、37冊すべて、あるいは植物部の全巻14冊が所蔵されていたかは不明だが、少なくとも植物部第8巻と第10巻の2冊が所蔵されていたことは確かである。

このほかにも所蔵者はあっただろうが未詳。

2. ハウトイン『自然誌』の訳出・利用

以下に、近世日本の本草学者や蘭学者が本書を利用している例のいくつかを紹介する。なお、②～⑧についてはこれまで指摘されていない。

①宇田川玄真・榕庵編『遠西医方名物考』⁽⁶⁾(文政5～8年刊)。

本文巻19「薩撒弗刺斯」の項目の記述は主としてハウトイン『自然誌』のサッサfras項目(Laurus Sassafras. .Deel, .Stuk,pp.360-365)に拠っている。ただし、巻36『名物図攷』にはミュンチング著『植物の正しい栽培』(“Waare Oeffening der Planten.” 1672年、アムステルダム刊)のサッサfras図(Sassafras Arbor Folio Ficulneo)が「薩撒弗刺斯」として収録されている⁽⁷⁾。

『遠西医方名物考』巻一の「凡例(文政5年)」第8条には「西洋説ヲ按スルニ凡ソ万物ノ地上ニ産スル者ヲ分テ三類トス。即チ動物。植物。山物ナリ是ヲ造化ノ三富ト謂フ。就中植物ニ於テハ古今ノ名哲特ニカヲ用ヒテ其品類ヲ研究シ種族ヲ分ツコト極メテ精覈ナリ」といい、続けて7名の西洋の植物分類学者を挙げ、「林娜私^{リンナウス}。特ニ其巨擘タリト云」とリンネによる植物分類法を説く。「学者先ツズノ如キ一科ノ学アルコトヲ知テ此篇ヲ読ニ非レバ草木ノ形状ヲ説クニ至テ漢人未ダ言ザル異様ノ名目。怪ミ疑フベキ者アリ」。すでに榕庵は旧来の本草学の研究方法を捨て、ここに述べたような西洋博物学の考え方に立つており、その大要を『菩多尼訶経』⁽⁸⁾に述べた。以後、榕庵はこの考え方に立って『植学啓原』(天保5年刊)を著し、未完におわった『動学啓原稿』⁽⁹⁾へと研究をすすめている。

『遠西医方名物考』巻十六「薩撒弗刺斯」に付される榕庵の按文には、「林娜私^{リンナウス} 本草図説ヲ考ルニ」あるいは「林娜私ノ説ニ」としてハウトインを引用する。このほか、本書では「老利兒^{ラウリール}・亜爾鮮^{アルモシ}・

薩毘那(サビナ)の按文、「蘇甘没^{スガムモウム}謨」の条下「格碌董篤^{コロキント}」説明文に「林娜私^{リンナシ}」の説を引用している。

また、本書の図篇である巻三十六には全63図が載るが、「林娜私カ本草書」からの転載は「魷失刺^{チヨツシラゴ}・垂兒尼加^{アールニカ}」の2図である。

② 栗本丹洲『魚貝譜』⁽¹⁰⁾第4冊「虎」の項(28ウ~29オ)に次のような記事がみえる。

虎 蛮書中ニ此図アリ。其図ヲ擴メテ、コヽニ抄図スルモノナリ。此蛮書八筑前ノ大守ヨリ許借セラル所ナリ。蛮名、口フトアリ。銅盤^{ママ}絵ニテ彩色ナシ。因テ本色如何ナリヤ不知。今借ニ、淡彩ヲ設テ見ルニ便ナラシム。

文政中夏日 丹洲写畢

試ニ魚肆ニ見セテ名ヲ尋ルニ、ガンギアイノ類ニモアリヤ、未見生物由答フ

丹洲は黒田斉清から拝借した蘭書中に虎の図を見いだした。蘭書では「口フト」の名のもとにこの魚の図(第28丁裏~第29丁表)が載るが、彩色が無いため実際の色は不明としている。丹洲は紫色と黒色の淡彩を施して転写している。

この記事から、文政年中には黒田斉清がハウトイン『自然誌』を所蔵していたこと、このハウトインの銅版図には彩色がなされていなかったことが判明する。因に、⑥『勃斯門西図』の図は彩色のあるハウトイン原本と同じ色で彩色されているから、斉清の蔵書とは別のハウトイン原本によったことが明らかである。

③『砂子 / 蛸図説』⁽¹¹⁾。本書は表紙に「萬香文庫」の赤茶色の印をもつ。また、版心下部に「萬香亭」とある刷り用箋を用いる。前田利保の自筆本。内容はクモ類を中心とした節足動物の図説。巻末の識語によれば、本書は天保9(1838)年10月10日に前田利保邸を会場にして催された本草研究会「赭鞭会」の記録である。参加者は前田利保(万香亭)、馬場大助(資生)、田丸六蔵(寒泉)、佐橋兵三郎(四季)、東溟、武蔵孫左衛門(石寿)、大坂屋四郎兵衛(清雅)の7名。

本文中に薄葉紙に透き写しにした18図が貼付される。このうち「カン

キロイデス 羅匈 / ジョルピンスピン 和蘭」「ハレナリウム 羅匈 / ワルヒセリユイス 和蘭」「レニホルメ 羅匈 / ラングゲアルムデ 和蘭」の3図には「林娜斯図」の、他の6図には「蘭図」の注記がなされ、これら9図が蘭書所載の図を写し取ったものであることを明記する。「林娜斯図」とされる3図がハウトイン『自然誌』動物部第13巻に掲載される図から転写したものである。本書ではこの3図だけに「林娜斯図」の注記がなされ、他の図の注記は「蘭図」とする。本書ではハウトイン『自然誌』を「林娜斯」として、他の蘭書(著者書名とも不明)と区別していることがわかる。この3図をハウトインの原図に充てると以下である。「カンキロイデス 羅匈 / ショルピンスピン 和蘭」図=ハウトイン「PLAAT C. / Fig.4」、
「ハレナリウム 羅匈 / ワルヒセリユイス 和蘭」図=ハウトイン「PLAAT C. / Fig.5」、
「レニホルメ 羅匈 / ラングゲアルムデ 和蘭」図=ハウトイン「PLAAT CI. / Fig.1」。折り畳んで綴じ込まれる濃青色の紙には「林娜斯本草動物第六綱」として蘭書の翻訳によるリンネ式分類が示されるが、この記事はハウトイン『自然誌』本文の欄外に記される分類を訳出したものである。

④中得一訳・前田利保附考『林娜氏訳 附考』⁽¹²⁾ 写本1冊。本書の蘭書原本は未詳とされてきたが、ハウトイン『自然誌』動物部の第1巻138頁～500頁と第2巻1頁～33頁(人間の部分と哺乳動物の一部)を訳出したものである(図は略される)。『林娜氏訳 附考』がハウトイン原著の人種部分を中心とする訳出であることは、楮鞭会の「軌則」⁽¹³⁾であげられていた研究課題「人類」の研究とかかわるのではないかと考える。残念ながら、今のところ楮鞭会での「人類」研究の動機は不明であるが、その研究内容は本書の記事とかかわると考えられる。天保期に「人類」というコトバが使われている事に驚く。

文政11年3月、長崎警護のため長崎戎營を巡視した第10代福岡藩主黒田斉清は、世子長溥を伴ってオランダ商館にシーボルトを尋ね、常々疑問とするところを質した。通訳にあたった家臣安倍龍平⁽¹⁴⁾はその時の問答を『下問雑載』⁽¹⁵⁾として記録した。龍平は志築忠雄門下の蘭学者である。シーボルトにたいする斉清の質問は草木や鳥獣のほか、世界地誌やそこに住む人々についてであった。このなかにオランウータンに関する問答が

ある。

齊清はシーボルトに対して、文化10(1813)年御笠郡山家駅に現れた奇獣のことを述べ、これが、かつて我が国に齎されたオランウータンに似ているのではないかと疑い、オランウータンについて質問した。

昔時、長崎ニオラン^マウータングヲ舶来セリ。其趾五ツ、踵地ニ至ラス。五指ヲ曲ケテ地ヲ踏ム。其迹三叉ノ形ヲ印スト云トキハ、前ニ山家駅ノ怪モ此オラン^マウータングノ足迹ニ似タリ。或ハ此モノ右ノ如キ怪ヲ為スモノニアラスヤ。オラン^マウータングノ性イカナルモノソ。今云怪獣ニ似タルコトアリヤ。尚、其説ヲ聞ン。(下線は原本では右傍線。以下同様。)

シーボルトは次のように説き、齊清の語った奇獣の存在を否定して、世の無学なる者はかつて見聞したことのない事物に会うときは奇怪として人に語るものであると答えている。

貴邦、山家駅ノ怪獣ヲ示サルハニ云々、其足跡能オウランウータングニ似タリト。オウランウータンクハ、唯勃泥ニ産ス諸猿ノ内、甚タ人ニ近シ。オウランハ猶人ト云カ如ク、ウータンハ猶林ト云カ如シ。二語合シテ林人ト云カ如シ。其形、能人ニ類スト雖トモ、諸猿ニ比スレハ最モ無智ニシテ、怒気ナク又奸黠ナラス。故ニ屢、機辟ニ中リ網罟ニ死ス。是等ノ怪異、必ス其所為ニ非サルコト明カナリ。弓弾丸ヲ辟ルコトヲ得ンヤ。疑ラクハ日本他ノ一種ノ者アツテ、是等ノ怪異ヲ顕ス者ナランカ。予未タ曾テ之ヲ見聞セス。然レトモ、今五大洲、更怪異ノ獣類アルヲ聞ス。且、窮理学者及本草家、親ク其怪異ヲ目撃スルモノナシ。之ニ遇フ所ノ者八田夫野人ニ過キス。世ノ怪事アル時ハ、諸人妄ニ之ヲ附益シテ伝説ス。我和蘭国ニモ亦、是等ノ流説多シ。然シ、之ヲ探索スルニ、必ス所以アリ。是皆奇怪ノコトニ非ズシテ、更ニ理ニ違フコトナシ。

齊清はさらに、オランウータンについての知識を披露した上で、オランウータンが勃泥(ボルネオ)にしか生息しないという説の正否を質した。

聞ク、オウランウータングハ特リ勃泥ニアルノミ、他産ナシト。実ニ然ルヤ。嘗テ聞ケルコトアリ。亜弗利加中クイネヤノ地ニ最も多シ。土人此獸ヲ捕得テ其家ニ豢ヒ、終ニハ馴致シ、或ハ飯ヲ炊キ又春ク等ノコトヲ習熟スルニ至ル。其驅使セラルコト奴僕ノ如シト云。ボイスノ書中二人ノ作業ヲ学ヒ得ルコトヲ云モノ、豈是類カ。又聞ク。拂郎察王ニ異物ヲ献ス。形チ人ノ如クシテ、唯語ルコトアタハサルノミ。是ヲサデイルト云リ。此他ニモ聞ク所アレトモ一々挙ルニ違アラス。此数説アルトキハ勃泥ノミニ限ルト云カタシ。

以下の問答は略すが、安倍龍平の割註に「ヒストリーヘシケレノーヒンギテルレイセン云全世界ノコトヲ記セシ書ノ第七冊ニ亜フリカ中アンゴラノ條ニハヒヤーンノ図ヲ出スヲミル。シーボルトノ説ニ異ナルニ似タリ」といい、この書の付図ヲ模写している。第45丁表の上欄の註「リンネウス本草云アルピセ山辺ノ婦人頸下に胡アリト云、又人ニシテ頭上角アリト云」はハウトイン『自然誌』第1巻155頁によっている。別の割註の末尾にも「リンネウス本草ニモ出」というから、龍平はハウトインも見ていたらしい。

齊清は寛政年間に長崎に齎されたオランウータンの剥製を入手している。オランウータンへの興味は寛政頃から続いている。よほど、オランウータンに興味を引かれたらしい。

⑤『林娜斯十一篇』『林娜斯第十二篇』『林娜斯第十七章』。写本1冊(他の翻訳と合冊)。国立公文書館内閣文庫蔵『文鳳堂雜纂 卷之六十九』⁽¹⁶⁾の第97丁～第179丁に収められる。『林娜斯十一篇』(第97丁～第120。全24丁。丁付なし)の内容は犬類の記述。『林娜斯第十二篇』(第121丁～第158丁。全38丁。一～卅八の丁付あり)は猫類。『林娜斯第十七章』(第159丁～第179丁。全20丁。丁付なし)は熊類と猪の一部。

熊の記述に引き続いて、第178丁表の第5行目に2字下げで「第十八章 猪の種類中にも野生家生の者、支那猪『グユイネヤ』アメリカの『ミユクスゼエイン』東印度の『ホールンハルケン』『バベイロウツサ』と名けし者等、此書中に属す(下略)」として猪の記述が始められている。この猪「VARKENS」に関する記述は「此獸の目徴を挙く」(第179丁表第3行目)としたまま、以下余白となっている。猪の記述はハウトインでは熊に続

いて第2巻248頁からはじまるから、この最初の部分を訳しかかったところで中断していることになる。これは筆写の際に中断されたのか、訳出そのものがここまでで終わっていたのかは不明である。また、犬類・猫類と熊類の間にある「XV. FRETTE. (フェレット)」(147頁～166頁)と「XVI. WEZELEN.(イタチ)」(167頁～212頁)の項が訳されなかった理由は未詳。

『林娜斯十一篇』『林娜斯第十二篇』『林娜斯第十七章』はそれぞれハウトイン『自然誌』では第2巻33頁～95頁「XIII. HONDEN.」、第2巻95頁～147頁「XIV. KATTEN.」、第2巻212頁～247頁「XVII. BEEREN.」に相当する。「十一篇」「第十二篇」は「第十三篇」「第十四篇」とするのが正しいはずである。また、原書では「篇」と「章」はどちらもローマ数字で表記されている。あえて「篇」と「章」と訳し分けたのは訳者の判断によるのだろうが、理由は不明。あるいは本書は未定稿であって、いずれどちらかに統一する予定だったのかもしれない。中得一訳『林娜氏訳 附考』では特に章節の言葉を用いずに「～ノ種類ヲ説ク」とし、そのなかを「第～種」と区別している。

また、『林娜氏訳 附考』は第1巻「I」から第2巻「XVII」「ROBBEN」までの訳であったから、本書はちょうどその続きに当たることになる。

『林娜斯十一篇』の巻頭を引用する。

林娜斯十一篇 諸犬ノ種類ヲ記ス。「ホンデン」 狼 狐 其它此類ノ獸
此中ニ在リ。○其目徴、其性質、其種類許多アルコト、并ニ它ノ地方ニアル「ヱルホンデン」、「ヘイアナ」及「ヤツクハルセン」ノ性等、此中ニ載ス

以下、「諸犬名義ノ原ヲ説ク / 諸犬の処位を説く / 『林』説の目徴ヲ挙く」と犬類の総論を述べ、「種族を挙く」として「第一種～第七種」について述べる。

同じ原書からの訳出だから当然ではあるが、④『林娜氏訳 附考』の記述と極めて似ている。両方で重なる訳出はないから、比較のため、⑤には訳されていない『林娜氏訳 附考』第十一篇の冒頭を引用する。

第十一篇

「ロッペン」ノ種類 ヲ記ス ○「ゼーペーレン」 「ゼーレーウ
ウェン」 「ワルリユスセン」 「ゼーカルヘン」 「ゼー
ホンデン」 等此中ニ属ス

以下、「『ロッペン』ノ名義ヲ説ク / 『林娜氏』ノ説ニ拠テ『ロッペン』
ノ目徴ヲ挙グ / 『ロッペン』ノ種類ヲ記ス」として、「第一種～第四種」を
説き、「『ロッペン』ノ種類々有コトヲ説ク」のもと四種の「ロッペン」の
説明、さらに「此獣ノ教訓セラルヘキ事ヲ説ク / 此獣トシテ八人魚ト見
ユルコト有ヲ記ス / 『ゼーカルフ』ノ身体形質ヲ説ク / 『ゼー
ホンド』ノ書記 / 諸『ロッペン』ノ生活ノ状ヲ説ク」の項目
が続く。

両者とも原書にある項目をそのままに訳出している（後半部分の内容の
違いはハウトインの記述のまま）。同一原書の訳とはいえ、訳語・記述の
構成などこれだけ訳文が酷似していることを考慮すると、本書もまた④と
同様に前田利保の命による中得一の訳出かと推測したい。

傍証として、犬の種類をあげた本文の上欄に朱筆で11種の和名が記さ
れており、「以上十一族狗楽善老侯所考」の朱筆がある。この朱筆は、利
保がハウトイン原本を共同で所蔵していた黒田斉清（楽善老侯）の意見を
得て、利保自身かあるいは中得一が注記したものではなかったか。仮説を
記して後の研究にまちたい。

本文中には「山」の按文がみえ、『林娜斯第十二篇』の末尾には「嘉
永四亥年十一月十四日写成 山」（嘉永4年は1851年）とある。「山按、
ドグ、漢訳禿歌歟」、「山按、マホメット、漢訳謨罕羆徳、或宇摩哈黙、
即同々祖師ナリ」、「エイキホールン、栗鼠ナリ、一名シユリカツト」など
の按文から判断すれば、山は漢訳西洋書によって西洋に関する知識を持
ち合わせている。山は漢学者で、山の号をもつ原田端太夫（名は正巽、
字子正）であろう。山には読本『通俗後西遊記』の著書がある。佐藤平
三郎の『奇獣考』に和漢の諸書を引用して補筆した「奇獣考附録」⁽¹⁷⁾の
著もあり、獣類に深い関心をもっていたようである。山は『林娜斯十一
篇』『林娜斯第十二篇』『林娜斯第十七章』を単に筆写しただけではなく、
内容についてもかなりの興味をもっていたことが窺える。

⑥訳者未詳『林 私嚙乳動物篇』⁽¹⁸⁾写本1冊(全16丁)。表紙には「未定稿本」の墨書がある(本書は原本未見のため複写本によった)。内容から、本書が④『林娜氏訳 附考』と同一原本であるハウトイン『自然誌』動物部の第1巻「VAN DEN MENSCH.」(人について)の翻訳であることは明白である。冒頭を引用する。

夫レ人ハ諸獣ノ長ニシテ、其第一位ヲ領ス。何者体質足ラサル所無ク、万々他物之及フ可ラサル所ナリ。実ニ獣中ノ君ナルカ故ニ、之ヲ貴重シテ獣王ト称シ、「ヘブレウ」ニハ之ヲ語獣ト名ケ、「エケーイプ」ノ法徒ハ拝敬ス可ク、且ツ驚駭ス可キ獣ト名ケ、「アリストレス」ニハ政獣ト名ケ、「シセロ」ニハ明理濬知ノ神獣ト名ク。「メンス」ト云フ語ハ、往古ノ「サキシイセ」語ノ「マアナン」ト云語ヨリ出テ、「マン」ト云フ語ト同義ニシテ、知覚辨明思慮ナド、云意ヲ含ミ、「ギリイキセ」ノ「メノス」及ヒ「ラテン」ノ「メンス」ト其義同シ。(下略)

上記のような人類の概説に続いて、「アメリカ人・エフロツ人・アジヤ人・アフリカ人」、さらに肥満体・小人・両身相接の女子等いわゆる奇形について述べている。

『林娜氏訳 附考』④でもハウトインの同一部分が訳出されているが、訳文は異なっており、同一の訳者によるものとは思われない。『林 私嚙乳動物篇』③は何者かが、『林娜氏訳 附考』とは全く別に、人の部分だけを訳出したものであろう。比較のため、『林娜氏訳 附考』から同一部分を引く。

人ハ万生ノ長タルヲ論ス

人タル者ハ実ニ第一目ノ動物ノ首ニ位スル者ナリ。其身体ノ生質ノ具足スルコトハ諸獣トヒトシクシテ、其威ノ諸獣ニ及フコトハ諸獣ノ王ト尊称スヘキ者ナレハナリ。○「^{ヘブレウ}批武例」地名ニ於テ修辭スル時ハ、「スプレーケンドヂール」ト名ク 又タ「^{エチオピア}陋日多」ノ僧徒ハ是ヲ「アーンビッテレイキ」ト称ス。○「^{アリストテレス}軋斯通哲氏」ハ是号シテ「スタートキュンヂフヂール」ト云フ。又「^{シヒロ}思示」ハ「ゴツデレイキヂールホルハンレーデンエン

ウワールデール」ト尊称スル。○「メンス」ト云フ辞、又タ「マン」ト云フ辞ハ本^{モトイニシヘ}古ノ「沙瓊泥亜」ノ古語「マナン」ト云フヨリ原キ来タル辞ト見ユ。此ノ「マナン」ト云フ辞ハ知覚思慮考案等ノ義ヲ示メス者ニシテ「諳厄利亜」^{イキリス}語ノ「メノス」及ヒ「羅甸」語ノ「メンス」ト同シ。此「メンス」ト云フ辞ハ知慧ノ義ナリ。(下略)

因に、本書の表題とされている「嚙乳動物」はリンネ分類法による動物の第一綱で、オランダ語では「EERSTE KLASSE. MAMMALIA ZOOGENDE DIEREN.」(ハウトイン『自然誌』動物部第1巻)と書かれ、今日では哺乳類の訳語が用いられている。

「哺乳動物」は宇田川榕庵の訳語で、榕庵の未定稿『動物啓原稿』の中にみえている。同書の「林氏内蔵ニ從テ動物ヲ分ツ」の分類表で、「心(臟)」が「有兩室兩耳 / 温紅血」で「胎生」するものを「哺乳動物」とする。この訳語が明治期に定着し、今日にいたるまで用いられているのである。②『林娜氏訳 附考』では「一綱 アムマリヤ ソーゲン デヂーレン 乳育動物」とし、「乳育動物」の訳語を充てる。⑥『林 私嚙乳動物篇』はハウトインの動物分類の細目は略しているが、表題に「嚙乳動物」の語を充てたのである。

⑦『勃斯門西図説』⁽¹⁹⁾ 彩色図説1枚(枠内：縦25.7×横38.3cm。図は手写、解説文は刷り)。高知県立牧野植物園蔵。「勃斯門西図」の表題のもと、薄様紙にオランウータンの図を透き写しにしたものを貼付し、解説を加えている。この図(図1)はハウトイン『自然誌』動物部第1巻の挿入図PLAAT V(図2)を透き写しにしたものである。また、解説文の「利謨匿無斯所輯本草図譜曰」はハウトイン『自然誌』第1巻P.336 L.24～P.337 L.24の記事「De Heer LINNAEUS wist ons tot dat Schepzel, 't welk door Geneesheer BONTIUS, die te Batavia gepraktizeerd heeft, is afgebeeld en beschreeven, onder den naam van *Orang-Outang*, dat BOSCH-MENSCH wil zeggen in de Indische Taal, en waar van ik de Afbeelding hier nevens heb gevoegd.(下略)」を訳したものである。

図の表題にある「勃斯門西()」は上記の蘭文中にある「BOSCH-MENSCH」の発音を漢字に充てたのである。オランウータンとはいって

も、ハウトインも現実には見たことがなかったらしく、想像によって描かれた猿人である。

図の下部に「Door moto:mitihee.」とある。これによって、本図は本岐道平(もとき・みちへい)の模写によるものであることが知られる。山本公簡による本図説の「甲午(天保5)年春正月」識語に「友人本木道平、頃日觀蘭書本草、使其養子如蘭以国字訳林人一條。又請子以漢文写之」と本図説の成立について記す。これによれば、近ごろ本岐道平が「蘭書本草」を觀て、このなかから「林人」の一條を養子の如蘭に翻訳させた。これを山本公簡が漢文に直したのがこの解説文である。

本岐道平は幕府の御徒であった⁽²⁰⁾。天保10年には養子栄作(英作とも。如蘭と号す)に譲って隠居の身であった。山本の識語に、「道平好事而多藝人也、於西洋奇器最得其理矣」という。道平については、高野長英・小関三英について蘭学を学び、渡辺華山とも知己であったらしいこと、天保10年1月から2月にかけて江川英竜の江戸湾備場見分に随行したこと、蛮社の獄に連座して洋式鉄砲の修理・鑄造の廉で押込めの処分を受けたことのほか、知られるところは少なかった。本図説は道平の「好事多藝」ぶりの一端を示すものといえよう。同識語には道平の養子如蘭について「如蘭、本長崎通士猪氏之子、今以医為業、於西洋医術殊得其妙矣」という。この記事によって、如蘭は長崎通詞猪俣氏の子で本岐道平の養子となり、西洋医学に秀で医を業としたことが明らかになった。実父猪俣氏は文政12年シーボルト事件に連座して獄中に没した猪俣源三郎か。源三郎は馬場為八郎の娘を娶っており、語学の天才といわれた長崎通詞出身の天文方蕃書和解御用・馬場佐十郎の義弟にあたる。また、蘭方医伊東玄朴は源三郎の父伝次衛門の門人で源三郎の娘を娶って一時猪俣氏の養子であったという。このように、如蘭の周囲には優秀な蘭学者たちがいた。

海外から長崎へ齎された鳥獸を描いた『唐蘭船持渡鳥獸之図』⁽²¹⁾に寛政4年(1792)と同12年(1800)に渡来したオランウータンの図が載る。いずれも長崎で死亡した。

大槻玄沢は長崎から通報された『唐蘭船持渡鳥獸之図』をもとに、『蘭摘芳』⁽²²⁾巻之三に兩年渡来の2頭のオランウータンについて記す。記事の中に、かつてボルネオ島に在住しオランウータンの自生地を遍歴したと

いう日本人商人の話を紹介し、寛政12年の「阿郎烏鳥当写真図」を付す。この人類に似た体型をもつオランウータンは、人と同様の運動機能と理解力をもち、人語を解し、人と同様の感情を示すという。「剥皮の全ては一侯家の蔵と為る。余も亦親視す」と付記している。森島中良の『惜字帖』⁽²³⁾第1冊には『唐蘭船持渡鳥獸之図』『蘭 摘芳』と同じ図柄の「オランウータンノ図(彩色) / 寛政十二庚申夏 西印度」が貼り込まれており、「山男 長崎ニテ死ス、全剥ノ物、薩州老侯ニ在」と付記する。寛政12年に齎されたオランウータンは剥製にされて黒田斉清(楽善堂)の所蔵するところとなったのである。斉清所蔵のものかどうかは不明だが、オランウータンの剥製は天保9年に江戸浅草大吉屋で開催された福井春水主催の虫干薬品会に出品された。出品物を解説した一枚刷り⁽²⁴⁾には「山客 猩々の属 蛮名ヲランウータン / 去ル寛政年間に舶来す。其後死す。よく人語を解し、また人を見るとき八みつから手を以て其陰を掩ふとぞ」という。雌のオランウータンが恥じらいの仕草をみせるという説は、西洋の博物学書に記述される俗説によっている。

オランウータンに、当時の人々は大きな興味をそそられたに相違ない。本図は④『林娜氏訳 附考』とともに、当時の本草学者の研究成果の一つであった。

⑧『林娜氏動物図』⁽²⁵⁾写本1冊(15丁)。書名は題簽による。題簽には書名の下に「単」とある。扉に「林娜氏図譜 / 丹波氏蔵」とあるから、本書の編者は丹波修治であろう。薄葉紙に動物図が透き写しによって模写されている。典拠とした書名にはふれていないが、ハウトイン『自然誌』からの模写である。動物名は記されず、ときに図版番号が示されるだけである。以下の動物名は筆者が仮に付けたものなので誤りがあるかもしれない。

[以下はハウトイン『自然誌』第6巻より]。

アンコウ(1オ) = 「PLAAT LVI. Fig.3」₁、シュモクザメ・エイ(1ウ) = 「PLAAT LV. / Fig.1, Fig.2」₁、蛇(2オ) = 「PLAAT LV. / Fig.1, Fig.4, Fig.5」₁、蛇(2ウ) = 「PLAAT LV. / Fig.2, Fig.3, Fig.6」₁、イグアナ(3オ) = 「PLAAT LIII. / Fig.2, Fig.3, Fig.4, Fig.7」₁、イグアナ(3ウ) = 「PLAAT LIII. / Fig.1, Fig.5, Fig.6, Fig.8」₁、蛇(4オ) = 「PLAAT LIV. / Fig.2」₁、蛇(4ウ) = 「PLAAT LIV. / Fig.1」₁、カエル(解剖図および生育過程の図あり)(5オ) = 「

PLAAT *LIII*. / Fig.1, Fig.3, Fig.4, Fig.5, Fig.6, Fig.10, Fig.11, Fig.12, Fig.13, Fig.17, Fig.18, Fig.19, Fig.20 ㇿ カエル (5 ウ) = 「PLAAT *LIII*. / Fig.2, Fig.7, Fig.8, Fig.14, Fig.15, Fig.16 ㇿ イグアナ (6 オ) = 「PLAAT *LI*. / Fig.1, Fig.3, Fig.5, Fig.7 ㇿ イグアナ (6 ウ) = 「PLAAT *LI*. / Fig.2, Fig.4, Fig.6, Fig.8 ㇿ トビトカゲ・カメ (7 オ) = 「PLAAT *L*. / Fig.2, Fig.3, Fig.5 ㇿ トビトカゲ・カメ (7 ウ) = 「PLAAT *L*. / Fig.1, Fig.4 ㇿ

[以下は第1巻より]

アリクイ (8 オ) = 「PLAAT *X*. / Fig.1, Fig.2 ㇿ (第8丁裏は墨付き無し)。ナマケモノ (9 オ) = 「PLAAT *IX*. / Fig.2 ㇿ ナマケモノ (9 ウ) = 「PLAAT *IX*. / Fig.1 ㇿ コウモリ (10 オ) = 「PLAAT *VIII*. / Fig.2, Fig.4 ㇿ コウモリ (10 ウ) = 「PLAAT *VIII*. / Fig.1, Fig.3, Fig.5, Fig.6 ㇿ 人体骨格図 (11 オ) = 「PLAAT *IV*. / Fig.1 ~ Fig.3 ㇿ 猿 (11 ウ) = 「PLAAT *VI* / Fig.1 ~ Fig.5 ㇿ ナマケモノ (11 ウ) = 「PLAAT *IX*. / Fig.1, Fig.2 ㇿ 林人 (12 オ) = 「PLAAT *V*. / Fig.1, Fig.2 ㇿ、肥満体の人物図 (12 ウ) = 「PLAAT *II*. / EDUARD BRIGHT. ㇿ

[以下は第2巻より]

ネズミ (13 オ) = 「PLAAT *XVIII*. / Fig.2, Fig.4 ㇿ ネズミ (線描図) (13 ウ) = 「PLAAT *XVIII*. / Fig.1, Fig.3 ㇿ アライグマ (14 オ) = 「PLAAT *XV*. / Fig.1 ㇿ イタチ (14 ウ) = 「PLAAT *XIII*. / Fig.1 ㇿ (第15丁表は墨付なし)。頭骨 (15 ウ) = 「PLAAT *I*. / Fig.1 ~ Fig.8 ㇿ

以上、本書の図がすべてハウトインの『自然誌』動物部第6巻、第1巻および第2巻に綴じ込まれる銅版図を透き写しにしたものであることを確認した。およそ巻ごとにまとめて綴じられている。紙面でハウトインの銅版図と図の位置が異なるのは、図の大きさによって紙を動かして模写しており、かならずしも同じ位置に転写されていないことによる。また、ハウトインの図の左右が転写本では袋綴じのため裏丁と表丁になっている。

『林娜氏動物図』の転写図はすべてハウトインの第1・2・6巻から選ばれているが、これは丹波の選択によるのだろうか。あるいは、この3冊しか借用できなかったことによるか。また、丹波修治が本図をどのような意図で転写したのかも不明である。因に、ハウトイン『自然誌』第3巻はシカ・ウシ・カバの図が、第4・5巻は鳥類、第7・8巻は魚類が収められて

いる。

⑨ 飯沼慾齋『草木図説』

遠藤正治氏によれば、飯沼慾齋『草木図説』の中でもっとも引用度数が多いのがハウトイン『自然誌』で、全引用度数 861 回のうち 273 回を占めるという⁽²⁶⁾。慾齋の「平林荘所蔵諸品目録」(慶応元年)には蘭書として「リンナユス 二箱四十巻」が記載され、本草書には「林氏譯稿 十四冊/一冊/別二目録小冊子一冊添」とあるのが、ハウトイン『自然誌』の原本と慾齋による訳稿と考えられている。慾齋のハウトイン『自然誌』入手の時期・経路とも不明で、現在はこの原本・訳稿(下記の1点を除き)ともに行方不明である。

松田清氏の御教示によれば、「百合」の部分の訳稿が残っているとのことだが、筆者は未確認。

⑩ 『西洋林娜斯本草喬木』所在不明。

⑪ 『加茂兎垂譚』(カメラ、椿類のこと)所在不明。

小柴直矩「越中の中草研究」⁽²⁷⁾にあげられている利保の著書に⑩⑪がある。これらは蘭書からの翻訳と推定でき、とりわけ⑩『西洋林娜斯本草喬木』はハウトイン『自然誌』の翻訳と思われるが、所在不明のため確かめることができない。

⑫以下の記事はごく断片的な記事で確証はないが、赭鞭会の仲間であった馬場大助の問にたいして前田利保が手元にあったハウトイン『自然誌』を調べて返答したものだろう。

馬場大助(資生園)著『舶上画譜』⁽²⁸⁾第1冊37丁裏「旋花」の条に「天保年中舶来ス。富山侯、蘭書中ノ『メコアカン』ナリト云。『メコアカン』旋花ノ一種也(下略)」。

⑬前田利保には後人によって『本草綱目取調草稿』⁽²⁹⁾(実は『本草綱目』とはまったく無関係)と題される1枚づつばらばらになった植物分類綱目表とも称すべきものがある。未検討のため断定はできないが、本書もハウトイン植物部からの訳出である可能性が強い。

⑭ 宇田川榕庵『植学啓原』の「林娜氏二十四綱」。

『植学啓原』巻之三の巻末に付される「植学啓原図」には、第十八図「林娜氏二十四綱」として雄薬と雌薬による二十四綱分類模式図が収められて

いる。本図がハウトインの『博物誌』を典拠とする説がある⁽³⁰⁾が、おそらく直接ハウトインを典拠としたのではなく、リンネ式分類法が広がった後に著された西洋の博物学書のいづれかに基づいたと考える。

「植学啓原図」の「二十四綱」図は、たしかにハウトイン「植物部」第1巻「PLAAT II」に酷似する。第十六綱・第二十四綱を除けば、「植学啓原図」の第一綱～第十五綱、第十七～第二十三綱の薬の描き方はハウトインと全く同じである。ただ、第二十一綱～第二十三綱の3図には根が描かれているが、ハウトイン図には根は描かれていない。

矢部一郎氏は『植学啓原』掲載の「二十四綱」図は、第二十四綱の図を除いて、リンネの『自然の体系』初版本とまったく同じとされた⁽³¹⁾。矢部氏が示された『自然の体系』初版の「二十四綱図」写真を見ると、第十六綱も異なっている。ハウトインがリンネを踏襲したから当然のことだが、第十六綱・第二十四綱をふくめてリンネ初版とハウトインとはほぼ一致する。リンネ初版の第二十一綱～第二十三綱には下部に根が描かれているが、ハウトインはこれを省いているのが違いである。『植学啓原』の「二十四綱」図は、おそらくリンネ初版の「二十四綱図」を踏襲しつつ、改定を加えた西洋博物学書によったと考えられる。この書がなんであるかは未詳。

文政9年2月21日(西暦1826年3月29日)、江戸参府途上のシーボルトは宮(熱田)で水谷豊文らの来訪を受け、豊文から自筆の動植物の写生図を見せられた。この植物図についてシーボルトは次のように日記に記している⁽³²⁾。上野益三氏は引用文中の「リンネのオランダ語版」はハウトイン博物誌の植物の部とする⁽³³⁾。

それは日本の植物を集めた絵で、すべて正確にリンネの名称で同定し分類してあった。各々の植物の下に属名があげてあったが、一〇二のうち私は四つの誤りを見つけただけであった。同定された属名のうちの多くはケンプファーもツェンペリーもこの国の植物にあげていなかったし、それらのうちの二、三のものは、私もまだ見たことがなかった。私は、彼がこれを作るためにどんな参考文献を使ったかを、どうしても知りたくて質ねたが、彼はただ研究の時にリンネのオランダ語版を使った、と言っていた。

註

- (1) 「『平戸藩楽歳堂蔵書目録』卷第十五別録の所在不明蘭書」(松田清『洋学の書誌的研究』臨川書店、1999年。331頁)。
- (2) 『故前田利保へ贈位についての請願書草案』写本1綴(富山県立図書館[T209.56-12])に収められる「蘭学」の条。
- (3) 宇田川榕菴『自叙年譜』、岡村千曳『紅毛文化史話』277頁(創元社、1953年)による。原本は早稲田大学図書館蔵。
- (4) 江馬春齡「東海紀行」(『藤渠漫筆』第9編巻3所収)。江馬寿美子氏所蔵。
- (5) 『飯沼慾斎』飯沼慾斎生誕200年記念誌編集委員会編発行、1974年。
- (6) 宇田川玄真・同榕庵『遠西医方名物考』(内閣文庫[195-282])による。
- (7) 松田清『前掲書』126頁。
- (8) 宇田川榕庵『菩多尼訶経』折本1帖、文政5年板。伊藤篤太郎により明治12年模刻本が板行された。
- (9) 同『動学啓原稿』自筆稿本1冊、武田科学振興財団杏雨書屋[貴372]。
- (10) 栗本丹洲『魚貝譜』写本6冊。西尾市教育委員会岩瀬文庫蔵[72-74]。第28丁裏～第29丁表に口魚図がある。
- (11) 『砂子 / 蛸図説』写本1冊(全13丁)。東大総合図書館[A00-5648]。ハウトインの図であることは慶應義塾大学名誉教授磯野直秀氏の御教示により、筆者も確認した。
- (12) 中得一訳・前田利保附考『林娜氏訳附考』写本1冊。武田科学振興財団杏雨書屋[杏1224]。
- (13) 拙稿「天保期の本草研究会『楮鞭会』」(『駿台史学』第98号、1996年9月)で2種の「楮鞭会業軌則」(A)(B)を紹介した。成立はAが

天保7年7月、Bは同年9月25日で、BはAを改定したものと考えられる。改定によって、Aにはなかった「人類」がBの「第五ノ日」の課題とされている

- (14) 安倍龍平(諱は正熊。一名龍、字は土魚。蘭畝、蘭圃また允蔵廬と号す)は文化3年長崎に遊学し、志築忠雄(のち中野柳圃)に入門してオランダ語を学んだという。文政2年10月26日36歳で直礼城代組に召し出され、間もなく同年11月20日には長崎詰方を命ぜられる、文政7年12月18日までのおよそ6カ年間、長崎詰方として長崎にあって蘭学を学ぶ。天保6年8月14日から御納戸役を勤め、嘉永元年10月15日没す、67歳。『下問雑載』のほか、ゲルヒルロンが著した露清ネルチンスク交渉記事の翻訳『二国会盟録』(志築忠雄口訳・安部竜記)がある。
- (15) 安倍龍平著『下問雑載』写本2冊。福岡県立図書館蔵[074-0061]。
- (16) 『文鳳堂雑纂 卷之六十九』写本1冊。国立公文書館内閣文庫蔵[217-36]。
- (17) 山の「奇獣考附録」は畑銀『奇獣考』(銀 自筆本、1冊。筑波大学図書館蔵[テ700-2])に収められる。銀の序に、「友人 山なる者、一日余が平亭を訪ふ。懐中より一冊子を出していふ。こたびかゝる奇書を得たりしゆゑ。足下に見せんがためわざ 持参せりとて。机上におきぬ。」と、本書が 山の持参したものに基づいたことをいう。
- (18) 『林 私嚙乳動物篇』写本1冊。鹿児島大学附属図書館蔵[天184-1289-1]。
- (19) 本図説は、2000年9月、高知県立牧野植物園の資料室で室長の小松みち氏から示され、一見してハウトイン『自然誌』の図に酷似することに気付き、同資料室に所蔵されていたハウトイン『自然誌』第1巻と同図であることを確認した。なお、同室蔵(牧野富太郎旧蔵書)のハウトイン『自然誌』は手彩色本。

- (20) 蛮社の獄に際して取り調べの記録には「御徒頭遠山半左衛門組、^マ景(栄)作養父と申立候 / ^マ土(本)岐道」とある(『藤岡屋日記』第2巻、1988年、三一書房、99頁)。
- (21) 『唐蘭船持渡鳥獸之図』(3帖)は海外から長崎へ齎された産物(鳥獸については絵を付した)を幕府へ通報する役割を担った高木家に残された史料。一部が磯野直秀編著『舶来鳥獸図誌』として出版されている(1992年、八坂書房<博物図譜ライブラリー5>)。
- (22) 大槻玄沢『蘭摘芳』3巻3冊、文化14年板。国会図書館[特1-216]による。
- (23) 森島中良『惜字帖』(早稲田大学図書館蔵[文庫8-53])。
- (24) 「天保九年六月二日より浅草御門外大吉屋にて虫干薬品会 / 春水福井先生鑑定」(一枚刷り)。神戸市立博物館蔵[12大-46]。
- (25) 『林娜氏動物図』(目録は扉にある「林娜氏図譜」を採る)写本1冊。国会図書館[特7-41]。
- (26) 遠藤正治「『本草図説』執筆期の飯沼慾斎」(『飯沼慾斎』所収)。
- (27) 小柴直矩「越中の本草研究」。『富山県史蹟名勝天然記念物調査報告』第十号(昭和5年5月)所収。
- (28) 馬場大助(資生)著『舶上画譜』。東京国立博物館蔵[和255]。
- (29) 前田利保訳『本草綱目取調草稿』。富山県立図書館蔵[T499.49-6]。
- (30) 宮下三郎氏は本図を「ホッタインの『博物記』の付図からきていると思う」とされた(宮下『和蘭医書の研究と書誌』1997年、井上書店51頁)。
- (31) 矢部一郎「宇田川榕庵と近代植物学 - 『植学啓原』を中心として -」(『植学啓原 = 宇田川榕庵翻刻と訳・注』1980年、講談社。279頁)。
- (32) シーボルト『参府旅行中の日記』齋藤信訳(思文閣出版、1983年)76頁。
- (33) 上野益三『年表 日本博物学史』(八坂書房、1989年)286頁。